

日本語の身体のふらつきや脱力を表すオノマトペ 「ヨロヨロ」、「ヨロツ」、「フラフラ」、「フラッ」、「クラクラ」、「クラッ」、 「ヘナヘナ」、「ヘナッ」、「ヘタヘタ」、「ヘタッ」の記述的研究

杉村 泰

DOI: 10.18999/stul.35.103

1. はじめに

日本語には「ヨロヨロ」、「フラフラ」、「クラクラ」のように身体感覚を表すオノマトペがたくさんある。しかし、日本語学習者はこれらのオノマトペの意味の違いを必ずしもよく理解しているわけではない。本稿では杉村(2017, 2018a, 2018b, 2019a, 2019b, 2020)で論じた痛みを表すオノマトペに続き、日本語教育への貢献を目的として、身体のふらつきや脱力を表すオノマトペ「ヨロヨロ」、「ヨロツ」、「フラフラ」、「フラッ」、「クラクラ」、「クラッ」、「ヘナヘナ」、「ヘナッ」、「ヘタヘタ」、「ヘタッ」の意味について論じる。

2. 先行研究

本稿で見る「ヨロヨロ」、「ヨロツ」、「フラフラ」、「フラッ」、「クラクラ」、「クラッ」、「ヘナヘナ」、「ヘナッ」、「ヘタヘタ」、「ヘタッ」に関して、小野(編)(2007)では次のように記述されている。

よろよろ ① **さま** 足どりが確かでなく、体が安定しないさま。体がゆれて倒れそうになるさま。「夢中によろよると歩いてみる彼の姿は宛さながら夢遊病者のやうであった」(青銅の基督・長与喜郎)「袖つけから半分ばかりぴりりと綻が切れ、三田もはずみをくってよろよると膝をついた」(大阪の宿・水上滝太郎) ② **さま** 動きや態度などが迷ったり不安定なさま。「これが不公平な戦争だから日本人が反対していると聞かされてもよろよろすることは

あるまい」(輝ける闇・開高健) ③ **さま** 弱々しいさま。「ボロボロに腐れ切ったヨロヨロの藁小屋で」(不在地主・小林多喜二)「自分の声は威嚇^{おど}される度によろよろする。さうして小さくなる」(永日小品・夏目漱石) (p.500)

よろっ **さま** 足もとが瞬間的に不安定になって、今にも倒れそうになるさま。魅力を感じて気持ちが傾くさま。「立ちくらみがして、よろっとなる」「見事な柄の帯についよろっとなった」(p.500)

ふらふら ① **さま** ものが力なくゆれ動いたり、飛んだり舞い上がったりするさま。「野道畔^{そば}ふらふらとふらつき廻る小挑燈^{てん}」(浄瑠璃・夏祭浪花鑑) ② **さま** 力がこもらず安定感のないさま。めまいや疲れ、空腹などで体が安定しないさま。「金ならいくらでもといふ商人も、栄養不良でフラフラの病人も来た」(蝮のすゑ・武田泰淳)「先刻の酒には強気に廻された。何だか頭がフラフラする」(歌舞伎彩入御伽草(おつま八郎兵衛)・鶴屋南北) ずきん。ずきり。(p.404)

ふらっ ① **さま** 一瞬平衡を失ってよろめくさま。「立ち上がったとたん、ふらっとした」② **さま** じゅうぶんに考えないで行動するさま。「わたくしはふらっ鏡の前にきて坐った」(婉という女・大原富枝)「フラッと紫のツナギとブラウスを衝動買いしたらお金なくなっちゃったの」(人間動物園・中島梓) ③ **さま** 何の気なしに突然やっきたり出て行ったりするさま。「客が一人、ふらっ店に入ってきた」(pp.403-404)

くらくら ① **さま** 不安定にゆれるさま。軽いめまいがするさま。「陽^ひの色を見てさへクラクラとして、目があいてゐられないほどの衰弱も」(多情仏心・里見弴) ② **さま** 気持ちが思わずゆらぐさま。ふらふら。「固定資産税評価額も昨年は一昨年の倍。何十億と積まれたらクラクラとくるもの」(東京ある記・朝日新聞・88・8・31) ③ **さま** 湯などが軽快にわきたぎるさま。ぐらぐら。「タンクの水がくらくらと煮立ち、やがしゅっと噴き出した霧の前に坐ると」(眼帯記・北条民雄) ④ 怒りや嫉妬などで、心の燃えたつようなさま。「彼女のくらくらと嫉妬に燃えた眼の前に」(風雨強かるべし・広津和郎) (p.103)

くらっ ① **さま** 急に大きくゆれ動くさま。「土橋を曲るところで、蔵つと俵がゆれて」(判任官の子・十和田操) ② **さま** 急にめまいのするさま。異性に心が引かれるさま。「貧血や更年期障害などでもクラッと来ることがあるが」(めまい、軽度でも油断禁物・毎日新聞・93・2・22) (p.104)

へなへな **さま** 頼りなくしないたわむさま。弱々しく形のくずれるさま。「十吉はへなへなした渡板の上を渡るのが、気味が悪いので」(小鳥の巢・鈴木三重吉)「赤茶けたへなへなした皮の、割れば茶色のうす皮に包まれた実がほんの申しわけばかりはいっているような」(おあんさま・大原富枝) ② **さま** 力が抜けて弱々しくくずれおちるさま。「とうとう石松はへなへなとくずれ落ちる」(裸の日本人・佐藤忠男) ③ **さま** 人の態度が頼りなげで弱々しく、腰だけのさま。「私はあんなへなへなした男は大嫌ひです」(あらくれ・徳田秋声) (p.424)

へなっ (記述無し)

へたへた **さま** 急に力が抜けて弱々しく倒れこむさま。「シマッタと思ふと全然手ごたもなくへたへただらしく負けるやうになった」(青鬼の禪を洗ふ女・坂口安吾)「へたへたに成行雲のあつさかな」(青猪)「俳諧一青筵」(p.416)

へたっ ① **さま** 支えや張りのないさま。力なく倒れたり、すわりこんだりするさま。「ワカメは水で完全に戻ってしまうと腰の抜けた、へたっとした食感になってしまいます」(日本料理で晩ごはん・朝日新聞・00・4・30) ② →へた。(p.416)

これを受け、本稿では国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を利用して、これらのオノマトペの被修飾語の違いを見ることにより、各形式の意味の違いを考察する。

3. 調査の概要

本稿では国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(通常版)」(BCCWJ)¹からオノマトペの用例を抽出した。検索画面の「キー」に以下の語を入力して用例を抽出した。

「中納言」の短単位検索

検索対象: 全データ

キー 語形が[ヨロヨロ] (or ヨロッ/フラフラ/フラッ/クラクラ/クラッ/ヘナヘナ/ヘナッ/
ヘタヘタ/ヘタッ)

しかし、短単位検索では「ヨロッ」の例が出現しなかったため、「ヨロッ」については文字列検索で次のように入力して検索した。

「中納言」の文字列検索

検索文字列 [ヨロッ] (or よろっ)

以上の検索によって出現した用例から手作業でごみを取り除いた。以下、各オノマトペの被修飾語の違いについて見ていく。

4. 「ヨロヨロ(と)」と「ヨロッ(と)」²

まず、「ヨロヨロ」の被修飾語を表1に示す。これを見ると、全202件中、上位には例(1)~(4)の「立ち上がる」「歩く」「起き上がる」「入る」のように上体を起こしたり体を移動させたりすることを表す動詞が来ている。

¹ 検索対象語数: 124,100,964 語、空白・記号・補助記号を除いた検索対象語数: 104,911,460 語。

² 本稿では「と」の有無については考察の対象外とする。以下の表でも「と」の有無を区別せず、両者を合計した出現数を示してある。

表1 「ヨロヨロ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数 202 語、異なり語数 63 語

順	被修飾語	件	順	被修飾語	件	順	被修飾語	件
1	ーする	30	7	近づく	5	11	後退する	4
	立ち上がる			後 ^{ずき} 退る			倒れる	
3	歩く	28		出る		戻る		
4	φ ³	6		進む		14	下りる	
	起き上がる		帰る					
	入る		向かう					
17	立つ、走る、逃げる、辿り着く、這う、ぶつかる、翻弄される、よろめく(8語)							2
25	下がる、下る、過ごす、降りる、寄る、曲がる、近寄る、駆ける、後退りする、歩む、歩み寄る、踏み出す、擦り寄る、 ^{すが} 縋る、 ^{すが} 取り縋る、出かける、出て行く、通る、這い出す、這い出る、這い上がる、昇る、登る、起こす、立ち直る、擡い上げる、飛ぶ、飛行をする、離れる、消える、退場する、バランスを崩す、ぶっ倒れる、ふらつく、よろける、(足が)乱れる、 ^{くずお} 頽れる、座り込む、気を失う(39語)							1

- (1) ブラッドが最後の力を振り絞ってよろよると立ち上がった。(木村明広『リムーバー・ソウル』)
- (2) 杖を突いた老人がよろよると歩いてくる。(富樫倫太郎『雄呂血』)
- (3) わたしはよろよると起き上がり、バスルームに入ってシャワーを浴びた。(小池真理子『夜は満ちる』)
- (4) 彼は犬のように喘ぎながら、よろよると茶の間へはいって来た。(芥川龍之介『夢の跡』)

中には例(5)～(8)の「倒れる」「よろめく」「座り込む」「気を失う」のように上体が崩れ落ちることを表す動詞も来るが、全 202 件中延べ 14 語しかない。(表1の網掛けの語)

- (5) ティテュスはぐったりして腹心ポーランの腕の中によろよると倒れる。(風間研『パリの芝居小屋から』)

³ 「φ」は「自分の落ち着ける場所を探してヨロヨロ…」(Yahoo!ブログ)のように後に述語が来ず、オノマトペ単独で動詞用法となっているものを指す。

- (6) 「あッ！」よろよると“風天の駒”がよろめいた。(丹羽一郎『耽溺』)
- (7) どうとう よろよると すわりこんで しまいました。(三田村信行『三つのねがい』)
- (8) 照蔵は、思ひ切つて矢を放し、見事林檎を射止め、其まゝ弩を落し、ヨロ / \ と気を失ふ。(植田敏郎『巖谷小波とドイツ文学 —くお伽噺の源』)

以上の例のように、「ヨロヨロ」は足取りが不安定で倒れそうになりながらも、上体を起こしたり体を移動させたりすることを表す場合に使われることが多い。この点で、小野(編)(2007)の記述を少し進めることができた。

また、例(9)のように、形式動詞「する」が付いて「ヨロヨロする」の形で使われる例もある。この場合は、「ヨロヨロする」全体で足取りが不安定で倒れそうな状態を表す。

- (9) 林は歩きだしたが、地面がふわふわで足がよろよろして定まらない。(かつお きんや『緑の島はるかに —台湾少年工物語』)

この他、BCCWJ からは例(10)、例(11)のように、「ヨロヨロに(なる)」の形で使われている例が2件出現した。この場合、「ヨロヨロ」は名詞または形容動詞として機能し、主体の足取りが不安定で倒れそうな状態になることを表す。例(10)はこれが有情物に使われた例で、例(11)は比喩的に非情物に使われた例である。

- (10) 彼の馬もまたよろよろに成り果てて、辛くも死地を脱することができた。(吉川英治『三国志』)
- (11) あのストラディバリウスでさえ、最後にはヨロヨロになって、彼が作ったヴァイオリンは呆けていたという噂もある(千住文子・千住真理子『母と娘の協奏曲』)

吉永(2016:21)はオノマトペを「ヒリヒリ(する/*だ)」のように主に「する」が付加され、「だ」は不可できない〈Aタイプ〉、「くたくた(だ/*する)」のように主に「だ」が付加される〈Bタイプ〉、「ふらふら(する/だ)」のように「する」と「だ」の両方付加できる〈Cタイプ〉、「ぐっすり(眠る/*する/*だ)」のように特定の動詞と結びつき、「する」や「だ」が付加できない〈Dタイプ〉の4つに分けている。この分類に当てはめると、「ヨロヨロ」には「する」も「だ」も付くためCタイプとなる。

次に、「ヨロッ」の被修飾語を表2に示す。「ヨロヨロ」も「ヨロッ」も足取りが不安定で倒れそうになる様子を表すが、「ヨロヨロ」が連続的な様子を表すのに対し、「ヨロッ」は瞬間的な様子を表す点で違いがある。「ヨロッ」は「ヨロヨロ」に比べて出現数がずっと少なく、全3件中2件が「ヨロッとする」の形で使われている。

表2 「ヨロッ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数3語、異なり語数2語

順	被修飾語	件
1	ーする	2
	φ	1

例(12)は主体の瞬間的なよろめきを表し、例(13)は主体の足取りが不安定な様子を表している。

- (12) よろっとした拍子に真紀子は後ろの食器棚の角に頭をぶつけた。(円より子『夫婦が離婚する理由、しない理由』)
- (13) あきらかにいつもより体温が下がってました。動きもよろっとして、毛の具合も多少ワポワ。(Yahoo!ブログ)

「ヨロッ」には「する」は付くが「だ」は付かないため、吉永(2016)のAタイプとなる。

5. 「フラフラ(と)」と「フラッ(と)」

次に、「フラフラ」の被修飾語を表3に示す。「フラフラ」は全548件中、約4割の215件が「フラフラする」の形で使われており、1割弱の41件が「フラフラだ」の形で使われている。このため、「フラフラ」は吉永(2016)のCタイプとなる。

「フラフラ」は「立ち上がる」「倒れる」「よろける」などに付いて身体(頭や足)のふらつきを表すほか、「歩く」「出る」「行く」など移動を表す動作との共起が多く、主体が一か所に落ち着かず、あちこちと渡り歩くことを表す用法もある。出現数は後者の方が多い。

表3 「フラフラ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数 548 語、異なり語数 106 語

順	被修飾語	件	順	被修飾語	件	順	被修飾語	件	
1	一する	215	10	近付く	6	19	やって来る	3	
2	歩く	44		漂う			よろける		
3	一だ	41		戻る			散歩する		
4	φ	29		彷徨 ^{さまよ} う			出かける		
5	出る	20	14	なる	5		倒れ込む		
	立ち上がる		15	出歩く	来る				
7	行く	9		走る	4		向かう		
8	入る	7	倒れる						
	飛ぶ								
26	さすらう、ついて行く、よろめく、寄り道する、起き上がる、見て回る、上がる、逃げる、動く、飛び出す、揺らす、揺れる (12 語)							2	
38	ウインドウショッピングする、うろつく、お散歩状態が続く、ぐらつく、ついて来る、できる、ドライブする、ぶつかる、ふらつく、まろび出る、移動する、運転する、押し出される、下りる、下る、回り込む、甘える、危なっかしい、寄り付く、寄る、起きる、起こる、吸い寄せられる、見て歩く、現れる、後退する、行き来する、行動する、降りる、降り立つ、腰を上げる、座り込む、座る、散策する、散歩に行く、耳を貸す、手を伸ばす、手を突く、上る、身を起こす、生命をつなぐ、足を向ける、帯ブラ、探す、追いかける、追跡する、定着する、踏み入れる、買い物、買い物に行く、飛びつく、飛び跳ねる、浮かれ出す、舞い降りる、舞い出る、舞い上がる、紛れ込む、歩き去る、歩む、放浪する、迷い出る、遊ぶ、落ちる、落ち着きがない、落下する、離れる、流れる、旅に出る、彷徨 ^{さまよ} い出る、北海道落ち (70 語)							1	

次の例(14)～(17)は「フラフラする」の例である。先の「ヨロヨロ」が足取りの不安定さを表すのに対し、「フラフラ」は例(14)や例(15)のように身体(頭や足)のふらつきを表す点で違いがある。また、そのふらつきの原因は、疲労、発熱、睡眠不足、泥酔、めまい、空腹、貧血など体の内部から来る異常によるものである点で特徴がある。

- (14) 今日入試なのに、夜全然眠れなくて頭がふらふらします。(Yahoo!知恵袋)
- (15) 六衛門が銚子と猪口を手に立ち上がる。足下がおぼつかない。ふらふらしながら伊織に近付いてくる。(富樫倫太郎『女郎蜘蛛 一時代暗黒小説』)

例(14)や例(15)が身体(頭や足)のふらつき状態を表すのに対し、例(16)や例(17)は主体が一か所に落ち着かず、あちこちと渡り歩くことを表している。このうち、例(16)は身体的な浮遊を表し、例(17)は精神的な浮遊を表している。どちらの場合も「フラフラする」は主体の落ち着きのなさを表し、マイナスイメージが伴う。

- (16) 気分転換のためにいろいろなところで煙草を吸うから、社内をふらふらしている。
(倉阪鬼一郎『活字狂想曲 一怪奇作家の長すぎた会社の日々』)
- (17) 彼氏がいる状態で他の男性に気を取られてフラフラするのはよくないです。(Yahoo!知恵袋)

例(18)～(20)は「フラフラだ」の例である。これは例(14)や例(15)と同様に身体(頭や足)のふらつき状態を表している。

- (18) 「ごめんなさい。疲労と睡眠不足のせいでふらふらなの」(シャロン・デ・ヴィータ(著)/藤田由美(訳)『恋人たちの聖地 一愛と思い出の絆 1』)
- (19) かなり酔っているらしく、ふらふらだ。(日比野宏『バンコクの罌 一あじなアジア 10 ショット』)
- (20) 最初は元気だったサキも、ふらふらだ。(深山さくら『おまけのオバケはおっちょこちよい』)

また、例(21)や例(22)のように、「フラフラ」は「漂う」や「彷徨う」など漂泊を表す動詞と共起する点で「ヨロヨロ」とは異なる。この場合、「フラフラ」は主体が一か所に落ち着かずに浮遊する様子を表している。

- (21) 無菌培養の水の中で、ふらふらとゴーフラのように漂っているだけの奴ら。(吉田珠姫『旦那さまとウェディングベル』)

(22) 自由を求めてフラフラと彷徨う。(Yahoo!ブログ)

この他、BCCWJからは「フラフラに」の形で使われる例が 37 件出現し、このうち 34 件が例(23)のように「フラフラに(なる)」の形で使われている。この場合、「フラフラ」は名詞または形容動詞として機能し、主体の身体(足や頭)がふらつき状態にあることを表している。

(23) 暑さと疲労でふらふらになり、何度となく安全な道はずれ地雷原に入り込んでしまった。(宇田有三『過酷な世界の天使たち 一生まれたこと・生きること・21 世紀を駆ける子どもたちへ』)

また、BCCWJからは例(24)のように「フラフラの」の形で使われる例が4件出現した。

(24) エネルギーをほとんど使い果たし、ふらふらの状態だった。(折原一『チェーンレター』)

次に、「フラッ」の被修飾語を表4に示す。「フラフラ」も「フラッ」も身体(頭や足)のふらつきや主体が一か所に落ち着かずに揺れ動く様子を表すが、「フラフラ」が連続的な様子を表すのに対し、「フラッ」は瞬間的な様子を表す点で違いがある。

表4 「フラッ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数 79 語、異なり語数 34 語

順	被修飾語	件	順	被修飾語	件	順	被修飾語	件
1	行く	12	4	立ち寄る	6	6	φ	4
2	～しに行く	7	5	やって来る	5		寄る	
	入る		8	出る	3			
9	ーする、出かける、眠くなる、遊びに来る、来る(5語)							2
14	いなくなる、一周する、帰る、現れる、姿を現す、姿を消す、乗り込む、飛び出す、飛ぶ、舞い込む、戻る、立つ、見る、旅する、旅に出る、旅行する、旅行に行く、花歩き、(レッスンが)受けられる、膝をつく、しおらしくなる(21 語)							1

例(25)と例(26)は主体が一か所に落ち着かず、あちこちと渡り歩くことを表す表現である。BCCWJから出現した「フラッ」はほとんどがこの例である。

(25) 警察はどうやら、夫は衝動的にふらっとどこかに行ってしまったのだろうと考えたみたいでした。(村上春樹『東京奇譚集』)

(26) 私は、ぶらぶら歩いて、気になったお店にふらっと入ることが多いかな。(望月リサ『Hanako』2004年10月13日号)

一方、例(27)は身体的なふらつき状態、例(28)は精神的なふらつき状態を表す例である。このような「フラッ」の例はBCCWJからは2件しか出現しなかった。(表4の網掛けの語)

(27) フラッ、と倒れるように膝をつく迅雷。(會川昇『十二国記アニメ脚本集』)

(28) ふらっとしおらしくなってついてきた自分が許せない、(玄月『異物』)

「フラッ」は「する」には付くが「だ」には付かないため、吉永(2016)のAタイプとなる。

6. 「クラクラ(と)」と「クラッ(と)」

次に、「クラクラ」の被修飾語を表5に示す。「クラクラ」は全183件中、約85%の155件が「クラクラする」の形で使われている。また、「クラクラだ」の形でも2件使われている。このため、「クラクラ」は吉永(2016)のCタイプとなる。

表5 「クラクラ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数183語、異なり語数13語

順	被修飾語	件	順	被修飾語	件	順	被修飾語	件
1	ーする	155	2	φ	9	3	ーなる	5
4	ーくる、ーだ、眩暈がする、煮える(4語)							2
8	よろける、意識を失う、引きずり込まれる、(空が)回る、倒れ込む、沸騰する(6語)							1

例(29)～(32)は「クラクラする」の例である。先の「フラフラ」が主体の内的な疲労やめまいなどから生じる頭や足のふらつきを表すのに対し、「クラクラ」は主体の内部から生じる病的な要因の他、暑さ、殴打、光やにおいなど外的な刺激が要因となって頭や目の立ち眩みやめまいの様子を表す点で違いがある。この中には、例(32)のように異性の魅力に幻惑される様子を表すものもある。

- (29) 起き上がると悪寒と眩暈で頭がクラクラした。(江川晴『医療少年院物語 一法務教官という名の看護婦』)
- (30) 夜間後ろを走っているとヘッドライトの光が反射して眩しくて目がクラクラするのですが。(Yahoo!知恵袋)
- (31) 頭がくらくらするような女の身体の甘い芳香が鼻腔に染み入ってくる。(謡堂『魔が落ちる夜 一デーモニックスレイブ』)
- (32) さて美人な「お姉さん」が隣に座って、クラクラしたのはいいのですが、いったい何を喋ればいいんでしょうか？(木村和久『週刊ポスト』2002年9月27日号)

また、「クラクラ」は例(33)のように「クラクラだ」や例(34)のように「クラクラとなる」の形でも使われる。この点で、先の「ヨロヨロ」や「フラフラ」とは異なる。

- (33) さすがに寝たとはいえ、夜勤はきついですね。午前中の活動、ちょっとクラクラなワタクシ。(Yahoo!ブログ)
- (34) 財津は、まずそのボリュームに頭がくらくらとなった。(吉村達也『哀しき檸檬色の密室』)

さらに「クラクラ」は例(35)や例(36)のように「眩暈がする」「よろける」「意識を失う」「引きずり込まれる」「(空が)回る」「倒れ込む」のような動詞に付いて立ち眩みやめまいの様子を表す場合もある。ただし、「クラクラする」に比べると出現数はわずかである。

- (35) 私は怒りのあまり、くらくらと眩暈がしそうであった。(氷室冴子『冴子の母娘草』)
- (36) 目から火花が出て、起きあがろうとしていたワタルはくらくらとよろけた。(宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』)

その他、例(37)や例(38)のように「クラクラ」は「煮える」や「沸騰する」などの動詞と共に起して、お湯が音を立てて沸きたぎる様子を表す用法もある。この場合、「クラクラ」は擬音語と擬態語を兼ねている。このような用法は「ヨロヨロ」や「フラフラ」には見られない。

(37) キッ！と男の顔を睨んで、クラクラ 煮え返った湯の中に浸けた。(丹羽一郎『耽溺』)

(38) ほたての冷凍物を解凍して、くらくら沸騰しているお湯にほうりこみ、(Yahoo!知恵袋)

なお、BCCWJ からは「クラクラに」の形は出現しなかった。この点でも「ヨロヨロ」や「フラフラ」とは異なっている。

次に、「クラッ」の被修飾語を表6に示す。「クラクラ」も「クラッ」も主体が一か所に落ち着かずに揺れ動く様子を表すが、「クラクラ」が連続的な様子を表すのに対し、「クラッ」は瞬間的な様子を表す点で違いがある。

表6 「クラッ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数 23 語、異なり語数 8 語

順	被修飾語	件
1	ーする、ーくる	8
3	Φ	2
4	ーなる、回る、(視界が)揺れる、 変える、変わる	1

例(39)は「クラッとする」、例(40)は「クラッとくる」、例(41)は「クラッとなる」の例である。いずれも一瞬の立ち眩みを表している点で共通している。この3つのうちでは、「クラッとなる」より「クラッとする」や「クラッとくる」を使う方が多いようである。

(39) その光景を見たとき、正直、私の頭はクラッとした。(稲川尚子『ママと呼んで！由くん』)

(40) 楽器・・・見ているだけでクラッとくる魅力があります。(Yahoo!ブログ)

(41) まさかね～人見てクラッとなったことなんて、今までに・・・(Yahoo!ブログ)

また、例(42)のように「クラッ」は異性の魅力に幻惑される場合にも使われる。

(42) スレンダーなボディが眩しいです(くらっ) (Yahoo!ブログ)

さらに、「クラッ」は例(43)や例(44)のように「回る」「(視界が)揺れる」に付く例もある。この場合、主体が対象を見てめまいを起し、一瞬視界が揺れた様子を表している。

(43) 見おろした祐也は、世界がクラッと回るのを感じた。(久和まり『Stay gold』)

(44) メアリーが、いや児島好江が肩を震わせて泣いている。クラッと視界が揺れた。(永瀬隼介『わたしが愛した愚か者』)

この他、「クラッと」は例(45)や例(46)のように「変える」「変わる」に付く例もある。この場合、大変化の様子を表す「ガラッと」に似ているが、「クラッと」を使うとめまいのするような急激な変化の様子を表す。

(45) 〈いまの連中みたいに、皇室観や日本史観をクラッとかえること、でけへんですワ〉
(田辺聖子『i めえ～る』)

(46) トモエが四十だと聞いて、かねての所説は、くらっと変ってしまったのである。(田辺聖子『ブス愚痴録』)

「クラッ」は「する」には付くが「だ」には付かないため、吉永(2016)のAタイプとなる。

7. 「ヘナヘナ(と)」と「ヘナッ(と)」

次に、「ヘナヘナ」の被修飾語を表7に示す。「ヘナヘナ」は例(47)～(50)のように「頹れる」「座り込む」「折れる」「負ける」など主体(有情物)が身体的・精神的に落ち込んだり、折れ曲がったりすることを表す動詞につきやすい。「ヘナヘナ」は「する」にも「だ」にも付くため、吉永(2016)のCタイプとなる。

表7 「ヘナヘナ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数 52 語、異なり語数 24 語

順	被修飾語	件	順	被修飾語	件
1	<small>くずお</small> 頹れる	7	4	崩れる	4
2	なる	6	5	倒れる	3
	座り込む			崩れ落ちる	
7	膝をつく、力が抜ける、－する、－だ、φ (5語)				2
13	(腰が)抜ける、(腰を)落とす、尻もちをつく、しゃがみ込む、へたり込む、座る、下りる、膝を折る、折れる、負ける、綴る、変形(する)、? (13語)				1

例(47)と例(48)は主体から支柱や芯が抜けたように力が抜けて、足腰が弱々しく崩れ落ちる様子を表し、例(49)は主体から気力が抜けて、精神的に腰砕けになっている様子を表している。例(50)は身体的・精神的の両面で弱々しく崩れ落ちる様子を表している。

- (47) あいつが東京にいる。そう思うと、彼女は足の力が抜けて、へなへなと床にくずおれた。(折原一『耳すます部屋』)する
- (48) 関谷は立ちすくみ、それからへなへなと座り込んだ。(内田康夫『白鳥殺人事件 一長編推理小説』)
- (49) もちろん命など奪いたくない。とはいえ、へなへな折れてやるつもりもない。(佐藤賢一『別冊文藝春秋』2004年5月号)
- (50) 自尊心が崩壊してゆくような快さに、へなへなと負けてしまいそうだ。(麻宮筭『ツインムーンの封印』)

このように「ヘナヘナ」は主体の力が抜けて上体が崩れ落ちる場合に使われる。この点で、上体を起こしたり体を移動させたりすることを表す場合に使われることが多い「ヨロヨロ」とは対照的である。

また、「ヘナヘナ」は例(51)、例(52)のように「ヘナヘナする」の形や、例(53)、例(54)のように「ヘナヘナだ」の形や、例(55)、例(56)のように「ヘナヘナの」の形でも使われる。このうち

例(51)は上の身体的な崩れ落ち、例(52)～(54)は上の精神的な腰砕けの意味を表し、例(55)と例(56)は非情物に張りがなく、弱々しくへこんだり曲がったりする様子を表している。

- (51) その体はへなへなとして、地面に倒れ、横になったままじっと動かない。(アルフォンソ・リングス(著)/管啓次郎(訳)『旅のはざま』)する
- (52) 「へなへなしたやつなんぞ、見るだけでもおれはきらいだからだろうよ」(富島健夫『二年二組の勇者たち』)
- (53) 心胆もはり裂けそうになりましたが、三蔵とて、へなへなです。(呉承恩(著)/中野美代子(訳)『西遊記』)
- (54) 権力なんて、お金でどうにでもなるへなへなな力なんだ。(加賀乙彦『雲の都』)
- (55) 一応ハードカバーだが、へなへなの表紙である。(Yahoo!ブログ)
- (56) 角縁眼鏡にスウェットシャツ、へなへなのカーキ・ズボンといういでたちの(ロバート・ジェームズ・ウォラー(著)/村松潔『スローワルツの川』)

また、少数ながら例(56)や例(57)のように「へなへな」が「綴る」や「変形(する)」に付く例もある。例(57)は筆画が直線、丸、点とはっきりしたハンゲルに比べ、くねくねと曲線を描く平仮名の力ない様子を表し、例(58)は直線的な T の字が弱々しくたわんで、曲線的な R の字になる様子を表している。

- (57) このハンゲルよりはへなへなつづるうちに文字になるかな好みの島国男子の脱プリンシプル状況を、(長璋吉『私の朝鮮語小辞典 一ソウル遊学記』)
- (58) タフの頭文字の T が姿勢を悪くして、へなへなと R の字に変形。(八坂裕子『COSMOPOLITAN 日本版』2001 年 3 月号)

この他、例(59)～(61)のように「へなへなに」の形で使われる例が4件出現した。この点で、「へなへな」は「ヨロヨロ」や「フラフラ」と共通し、「クラクラ」とは異なっている。

- (59) 「とにかく赤ちゃんに吸ってもらおう事」と書いてあったので乳房がへなへなになるまで吸わせています。(Yahoo!知恵袋)
- (60) この瞬間、直線でただハンドルをきちんと握っていさえすればいいボクの顔はへな

日本語の身体のふらつきや脱力を表すオノマトペ「ヨロヨロ」、「ヨロッ」、「フラフラ」、「フラッ」、「クラクラ」、「クラッ」、「ヘナヘナ」、「ヘナッ」、「ヘタヘタ」、「ヘタッ」の記述的研究

ヘナに緩みっぱなしだ。(渡辺敏史・西川淳『GENROQ』)

(61) ELTのモッチーは、何であんなにへなへなに歌うのですか？(Yahoo!知恵袋)

次に、「ヘナッ」の被修飾語を表8に示す。「ヘナヘナ」も「ヘナッ」も有情物の身体的・精神的に脱力した様子や非情物の弱々しくへこんだり曲がったりする様子を表すが、「ヘナヘナ」が連続的な様子を表すのに対し、「ヘナッ」は瞬間的な様子を表す点で違いがある。その例を例(62)に示す。

表8 「ヘナッ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数1語、異なり語数1語

順	被修飾語	件
1	座る	1

(62) へなっとやることなく座っている、恵文の背中を見て。(岡田恵和『ちゅらさん』)

「ヘナッ」はBCCWJからは上の1件しか出現していないが、内省では「ヘナッとする」とは言えても「ヘナッ(と)だ」とは言えないため、吉永(2016)のAタイプであると考えられる。

8. 「ヘタヘタ(と)」と「ヘタッ(と)」

次に、「ヘタヘタ」の被修飾語を表9に示す。「ヘタヘタ」は「する」も「だ」も付かないため、吉永(2016)のDタイプとなる。

表9 「ヘタヘタ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数12語、異なり語数8語

順	被修飾語	件	順	被修飾語	件	順	被修飾語	件
1	座り込む							5
2	座る、倒れる、崩折れる、膝をつく、しゃがみ込む、ずり落ちる、腰を抜かす(7語)							1

例(63)～例(65)に示すように「へたへた」も「へなへな」と同様に「座る」や「倒れる」に類する動詞と共に起し、主体から^{たが}箍やボルトが外れたように力が抜けて、体が地面にへばりつくように崩れ落ちる様子を表す⁴。

- (63) 男は緊張が解けたのか、へたへたと雪の中に坐り込んだ。(澤田ふじ子『陸奥甲冑記』)
- (64) ローダボーは哀願し、へたへたとその場に膝をついた。(逢坂剛『アリゾナ無宿』)
- (65) 伴さんはその場に腰を抜かしたように、へたへたと崩折れてしまった。(野上照代『天気待ち — 監督・黒澤明とともに』)

なお、BCCWJ からは「へたへたに」の形は出現しなかった。この点で「へたへた」は「へなへな」とは異なっている。

次に、「へタッ」の被修飾語を表 10 に示す。「へたへた」も「へタッ」も主体から^{たが}箍やボルトが外れたように力が抜けて、体が地面にへばりつくように崩れ落ちる様子を表すが、「へたへた」が連続的な様子を表すのに対し、「へタッ」は瞬間的な様子を表す点で違いがある。「へタッ」の例を例(66)に示す。

表 10 「へタッ(と)」の被修飾語 (出現数)

延べ語数 1 語、異なり語数 1 語

順	被修飾語	件
1	座り込む	1

- (66) ベッドマットの縁を背に、へタッと座り込み辺りを見渡す。(森浩美『推定恋愛』)

「へタッ」は BCCWJ からは上の 1 件しか出現していないが、内省では「へタッとする」とは言えても「へタッ(と)だ」とは言えないため、吉永(2016)の A タイプであると考えられる。

⁴ 小野(編)(2007)は「へた」「べた」「ぺた」は、平ぺったくへばりつくニュアンスを持ったオノマトペである。このうち「へた」は、もともと「ひれ伏す」の意味を持った「へたばる」と同根であり、気が抜けて座り込んだりするようすを表す(p.417)と説明している。

9. まとめ

最後に、表 11 に本稿で論じた身体のふらつきや脱力感を表す 10 語のオノマトペの意味をまとめておく。

表 11 本稿で論じた 10 語の特徴

	タイプ	連続性	～になる	意味・特徴
ヨロヨロ	C	連続	可	①主体の足取りが不安定で倒れそうな状態を表す。 ・倒れそうになりながらも、上体を起こしたり体を移動させたりすることを表す場合に使われることが多く、上体が崩れ落ちる場合に使われることは少ない。
ヨロッ	A	瞬間	不可	
フラフラ	C	連続	可	①体の異常による身体(頭や足)のふらつきを表す。 ②主体が一か所に落ち着かず、あちこちと渡り歩くことを表す。(マイナスイメージが伴う) ・「フラフラ」は「フラフラする」の形が多い。
フラッ	A	瞬間	不可	
クラクラ	C	連続	不可	①主体の内部から生じる病的な要因の他、暑さ、殴打、光やにおいなど外的な刺激が要因となって頭や目の立ち眩みやめまいの様子を表す。 ・異性の魅力に幻惑されることを表す場合もある。 ・「クラクラする」の形で使われる例が多い。 ②お湯が音を立てて沸きたぎる様子を表す。(擬音語と擬態語を兼ねている)
クラッ	A	瞬間	不可	①主体の内部から生じる病的な要因の他、暑さ、殴打、光やにおいなど外的な刺激が要因となって頭や目の立ち眩みやめまいの様子を表す。 ・異性の魅力に幻惑されることを表す場合もある。 ②めまいのするような急激な変化の様子を表す。
ヘナヘナ	C	連続	可	①主体から支柱や芯が抜けたように力が抜けて、足腰が弱々しく崩れ落ちる様子を表す。 ②主体から気力が抜けて、精神的に腰砕けになっている様子を表す。 ③非情物に張りがなく、弱々しくへこんだり曲がったりする様子を表す。
ヘナッ	(A)	瞬間	不可	
ヘタヘタ	D	連続	不可	①主体から <small>な</small> が箍やボルトが外れたように力が抜けて、体が地面にへばりつくように崩れ落ちる様子を表す
ヘタッ	(A)	瞬間	不可	

(注)タイプ A は「する」のみ付くもの、タイプ C は「する」と「だ」が付くもの。
「ヘナッ」と「ヘタッ」は内省で判断したため括弧書きとなっている。

付記: 本稿は 2019-2021 年度科学研究費基金(基盤研究(C))「心身のオノマトペの形態と意味の相関について—医療福祉分野への貢献を目指して—」(研究代表者: 吉永尚、課題番号 19K00725)による研究成果の一部である。

[参考文献]

- 小野正弘(編)(2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 杉村泰(2017)「日本語のオノマトペ「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」の記述的研究」『ことばの科学』第 31 号, 名古屋大学言語文化研究会, 111-130
- 杉村泰(2018a)「日本語のオノマトペ「チクチク」、「チクッ」、「チクリ」、「チクリチクリ」の記述的研究」『ことばの科学』第 32 号, 名古屋大学言語文化研究会, 5-23
- 杉村泰(2018b)「日本語のオノマトペ「キュン」、「キュンキュン」、「キューン」、「キュッ」、「キュッキュッ」の記述的研究」『ことばの科学』第 32 号, 名古屋大学言語文化研究会, 25-44
- 杉村泰(2019a)「日本語のオノマトペ「ガンガン」、「キリキリ」、「シクシク」、「ジンジン」、「ジーン」の記述的研究」『ことばの科学』第 33 号, 名古屋大学言語文化研究会, 5-24
- 杉村泰(2019b)「日本語のオノマトペ「ズキズキ」、「ズキン」、「ズキンズキン」の記述的研究」『ことばの科学』第 33 号, 名古屋大学言語文化研究会, 25-33
- 杉村泰(2020)「痛みを表す日本語のオノマトペの選択に関する一考察 —日本語話者と中国人日本語学習者の比較—」『ことばの科学』第 34 号, 名古屋大学言語文化研究会, 25-44
- 吉永 尚(2016)「心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析」『園田学園女子大学論文集』50, 21-28